

■ 編集だより

編集後記

大学では以前にも増して、国際化と国際競争力の強化が重視されてきており、英文医学雑誌への論文掲載を活性化させることの意義は益々高まることはいうまでもないことですが、最近、和文医学雑誌が存在することの有難さを改めて感じる体験をしたので、ご紹介させていただきます。平成25年11月4日に台風第30号（アジア名ハイエン、フィリピン名ヨランダ）に見舞われたフィリピンを数回訪れる機会を持ちました。フィリピンで交流した医師、研究者はいうに及ばず、タクシーの運転手さんや商店の店員さんに至るまで、皆、流暢に英語を話します。いわゆる「国語」であるフィリピン語とともに英語が公用語として普及し、町の看板、レストランのメニュー、テレビ、新聞も全て英語です。このような土壌がビジネスや医療・医学において、英語でのコミュニケーション、情報発信の上で有利に働くことは間違いないでしょう。フィリピンの災害メンタルヘルスの活動は1991年にルソン島、マニラの北西90kmに位置するピナツポ火山が噴火した際に本格化した歴史がありますが、その直近の大学での行事に向かう最中に現地の大学関係者と話した際に、上記のような感想をお話したところ、次のような話を聞かせて頂きました。

フィリピンは7千を越す島々から成り、島や地域、民族ごとに170を越す多様な言語が存在します。フィリピン語は、そのような多様な言語の一つであるタガログ語を標準化した言語で、フィリピン人の多くは出身地域の言語に加えて、フィリピン語と英語の3言語を使い分けていることとなります。これには、1898～1946年までの48年間、米国の植民地下で、米国の導入した教育制度に基づいて、国語と社会以外の教育が英語でなされたことが大きいといえます。さらにその背景として、フィリピン語はタガログ語をもとにしていることから、セブアノ語など他の言語を話す民族からの有形・無形の反発があることなどから、国内での多民族間の会話には、フィリピン語よりも英語が用いられる傾向もあるそうです。また、人口の約1割が海外で仕事をし、フィリピンはGDPの1割を海外からの送金が占めていることもあり、義務教育の小学校を卒業するまでには英語を話せるようにするという政府の方針があるそうです。2012年のTOEFLテスト結果はアジア30カ国中、フィリピンが4位で日本は26位、同じく米国Global English社が世界78カ国の様々な産業で働く従業員の「職場で使用する英語力」調査によると、フィリピンが米国等を抜いて第1位、日本は50位だそうです。その背景には、上述の強い必然性、動機、歴史がある訳です。

現在でも、フィリピンの教育における英語重視の姿勢に変わりはないものの、地域の言語の重視や保護を訴える考えもあり、また、英語による教育についていけずに落ちこぼれる児童が多いことなどから、母国語教育の頻度を増す方向での見直しが進められてきているとのことです。やはり、母国語でなければ、伝えることが難しいことや、浮かばない発想はあるでしょうから、言語習得課程において、母国語を教育に取り入れていくことには一定の意義があるものと思います。

とはいえ、フィリピンの医学教育を含む高等教育は今でも全て英語で行われている訳ですが、そもそも、医学用語をはじめとする専門用語に相当する母国語は存在しないため、母国語で教育しようにもできないそうです。翻って、私たちは、当たり前のように、幼少期から肌身に染みている日本語で医学教育を受け、また、患者さんから母国語で聴取したことを、そのまま記載することができます。さらに、日本語で医学論文を記し、それを医学雑誌に掲載することができるのです。日本語だからこそ、伝わること、日本語だからこそできる発想もあるように思います。それは、そういう文化を築くことが許された社会状況、歴史や、杉田玄白ら江戸時代の蘭学者以来のあまたの医療者・医学者の尽力や苦労があったからこそという訳です。そのようなことから、本誌の存在の有難さを実感するこの頃です。

富田博秋